

2016年秋 武庫川渓谷で観察したカメ目2種の報告

法西 浩 (ひとはく地域研究員, 武庫川づくりと流域連携を進める会)

10月2日(日)晴 宝塚市玉瀬武庫川渓谷へ探鳥に訪れた。場所は JR 福知山線武田尾駅から武庫川渓谷左岸へ1~1.5km 上流である(図1)。数日來の雨で再び渓谷は増水し、水は濁っていた。

水面からわずかに顔を出している近くの岩に、カメ数個体が日光浴をしていた。カメラを向けると、つせいに水に飛び込んだ。幸い遠くの1個体だけがやっと撮れた(写真1)。時間は午後3時30分頃で、日は陰り始め薄暗くなっていた。撮れた画像を引き伸ばすと、甲背が平坦なことで、頭部の先端が突出していることで、スッポンだろうと思われた。

さらに鮮明な多くの画像が欲しくなり、10月15日(土)午後再びここに訪れた。くもりで谷間は暗かったが、幸いにもかなり水は引いて、露出している岩は多く、スッポンらしいカメの他に、ニホンイシガメらしい多くのカメも見た(写真2)。

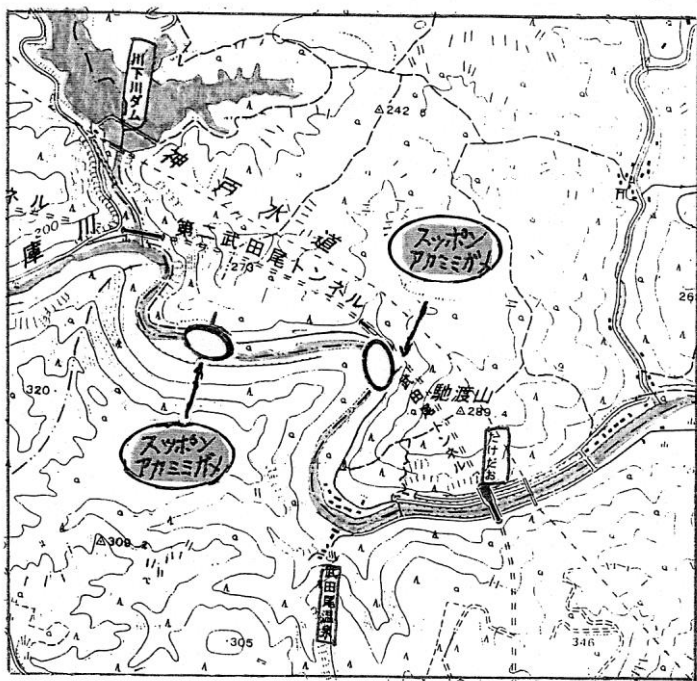


図1. スッポン、アカミミガメの生息地

写真1・2は、兵庫県立人と自然の博物館(以下ひとはく)と、大阪市立自然史博物館(以下自然史博)に同定をお願いした。両博物館の回答では、写真1はスッポン、写真2はアカミミガメだった。ひとはくの安井健二先生、自然史博の和田岳先生に厚くお礼申し上げる。

2003年改訂版「兵庫の貴重な自然-兵庫県版レッドデータブック」でスッポンは要調査種である¹⁾。また、神戸・阪神地区では、未確認となっている¹⁾。安井健二先生からの回答では、爬虫・両生類について専門に研究している研究員に確認したところ、写真は間違いなくスッポン(*Pelodiscus sinensis*)とのことだが、在来のニホンスッポン(*Pelodiscus sinensis*)と外来性の高いチュウゴクスッポン(*P. s. sinensis*)の集団が混在しており、場所によっては外来のものから在来のものへと遺伝的攪乱が生じていることも懸念されるとのこと。そのために、レッドデータブックでも要調査種とされ、わざわざ指定対象のところに(在来個体群)の語が添えられている¹⁾、とのことだった。なおこ

の2亜種は、遺伝的には比較的明瞭に異なるものの外見は酷似する。この研究員によると、県内のスッポンの分布に関しては、きちんとした記録が比較的少ないので、今回の撮影記録はぜひ、日時・場所・確認状況の情報とともに何らかの形で発表していただければ、とのことだった。

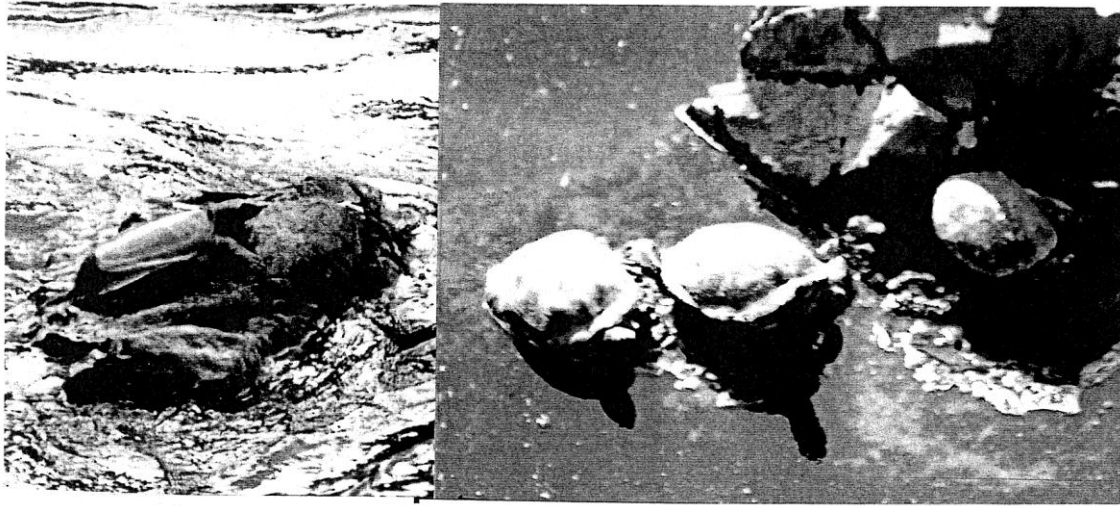


写真1. スッポン 2016.10.2 写真2. アカミミガメ 10.15 武庫川溪谷宝塚市玉瀬

10月2日、15日両日、武庫川溪谷でスッポンそれぞれ数個体ずつを観察したことは、この深い溪谷で生息が示唆できる。筆者はその生息に不思議に思ったので、スッポンの形態、分布、生息環境を爬虫・両生類の専門書で調べた²⁾。その特徴を簡単に列挙する。

- ・甲長 25mm～30mm（雌雄とも）、背甲は非常に平たく柔らかな皮膚におおわれ鱗板を持たない。
- ・鼻の先端が突出（シュノーケル状）し、普段は水底の砂や泥に潜って鼻だけを出す。
- ・主に河川の中流から下流にかけて、平地の湖沼などの砂泥質の場所に生息。
- ・物音には敏感でたいてい近づく前に気づかれ水に入る。
- ・性格は荒く、顎が長く伸びよく噛みつく。
- ・肉食性で魚や貝類、甲殻類、水生昆虫などさまざまなものを食べる。
- ・古くから養殖されたり、海外からの移入もあり、交雑が進んでいる可能性（前述）がある。

上記の本種の特徴に照らして考えてみると、武庫川溪谷は河川の中・下流にあたり、また広い淵があり、淵の川床は砂泥質であり、魚・貝類、水生昆虫も豊富なので、十分に生息環境が整っているといえる。

次に写真2について考察しよう。写真2の回答がアカミミガメだった、ということにビックリ仰天。筆者は武庫川上流でしばしばニホンイシガメを確認していたからである。

アカミミガメの決め手になったのは、側頭部の眼の後部から頭部にかけて走るたて長の赤斑である。この赤斑を耳に見立ててアカミミガメと呼ばれる。写真2の3個体すべてに赤斑が見られる。しかし、不鮮明である。暗い環境下での撮影だと考えられる。

アカミミガメは、甲長雄 20mm、雌 28mm、帰化種、現在は都会の池、堀、公園などで目にする機会は多い。河川の中・下流のよどんだ水域、池沼に生息。1975年に、本亜種からサルモネラ菌（土中の常在菌で問題ないのだが）が発見されマスコミで報じられ、膨大な数の「捨て亀」が横行した。これは、飼育放棄、犯罪的行為である。ある地域では駆除が始まっている。

武庫川溪谷で撮ったスッポン以外のカメ目はすべてアカミミガメだろうか。普通種クサガメ、ニホンイシガメは生息していないのだろうか。ニホンイシガメは現在希少種として保護の対象としている自治体がある。アカミミガメがスッポンを駆逐する勢いで繁殖するのだろうか。スッポンを保護する必要があるのか。考える必要がある。